

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：13102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00829

研究課題名(和文) 多読による付随的語彙学習効果を高める要因の究明：効果的な指導提言とともに

研究課題名(英文) Investigation of the factors that enhance the effect of incidental vocabulary learning by extensive reading: With the effective instruction guidelines

研究代表者

藤井 数馬 (FUJII, Kazuma)

長岡技術科学大学・工学研究科・准教授

研究者番号：50413779

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、多読が語彙サイズの伸長に与える効果の検証と、その効果を高めるための指導法の探究である。参加者は大学3～4年生(A1～B1レベル)で、15週間の多読指導を受け、約35,000語を読んだ。語彙サイズテストを多読の前後で行ったところ、多読前の英語力、読語数、図書媒体(紙か電子か)の選好の違いによって多読後の語彙サイズの伸長に顕著な差は生じなかった。しかし、未知語に注意を払って読ませる指導をしたことで、多くの語数を読ませた時と比べ有意に語彙サイズが大きく伸びた。本研究により、未知語に注意を向けて読ませる指導を多読に組み合わせることは語彙サイズの効果的な伸長につながる示唆を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、多読が語彙サイズの伸長に与える効果の検証と、その効果を高めるための指導法を探究した。大学3～4年生(A1～B1レベル)を対象に、15週間の多読指導を実施したところ、多読に組み合わせた指導によって学習者の英文の読み方や、語彙サイズの伸長に大きな影響を与える可能性がわかった。15週間の多読で語彙サイズの効果を高めたい場合には未知語への注意を高めると効果的であるが、質問紙結果からは、好きな本と出会い、長期的に多読を行うという点では理想的な指導ではないことが示唆された。多読は指導の焦点によって効果が異なるため、授業の目標、目的に応じた導入や指導が可能であり、必要であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to examine the effect of extensive reading (ER) on vocabulary growth and to explore instructional guidelines to enhance this effect. Participants were third- and fourth-year university students (A1 to B1 level on the CEFR) who participated in a 15-week ER program, reading approximately 35,000 words on average. Vocabulary size tests were administered before and after the ER program. The results showed no significant differences in vocabulary growth based on initial English proficiency, the number of words read during the program, or book medium preferences (paper or electronic). However, when students were instructed to pay attention to unknown words, their vocabulary size increased significantly more than when they were simply assigned to read a large number of words. This study suggests that combining ER with instruction that directs students to focus on unknown words may effectively increase vocabulary size.

研究分野：第二言語習得論、英語教育学

キーワード：多読 語彙サイズ 電子図書 コーパス

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

英語多読が日本の英語教育で本格的に導入されて 20 年ほどが経過した。日本では、酒井(2002)による多読三原則の提言や、日本人英語学習者にとってのリーダビリティ指標である YL の開発(古川, 2010)などとともに、特に 2010 年代にかけて校種を問わず日本の英語教育で広がった(高瀬, 2010)。そして、多読実践の広がりとは並行し、多読が英語習得へ与える効果に関する実証研究が国内外で多く行われ、多読がもたらす効果は一定の認知を受けている。多読による具体的な効果としては、読解速度、読解力、語彙力、文法力といった領域だけの向上だけでなく、情意面の改善や、英語習熟度試験のスコアの向上などが報告されている(Nation & Waring, 2019)。

本研究は、多読が語彙習得に与える影響について探究したものである。本研究で語彙に着目したのは、多読は付随的語彙学習を促し、語彙サイズ伸長に効果的だと言われている(Day, 2015)が、新語の習得効率は高くないことが指摘されている(Waring & Takaki, 2003)ことを背景にしている。この背景に基づくと、「どういった英語力の学習者に、どの程度、どのように英語を読ませれば、語彙サイズ伸長に効果的か」に関する探究、および、限られた英語授業時間に鑑み、「多読にどのような活動を組み合わせることで語彙習得効率が上がるか」に関する研究が、教育現場で活用できる指導指針を策定するために必要であるからである。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本人大学生を対象にして多読指導を行った際の語彙サイズの伸長に与える効果の検証と、その効果を高めるための指導法を探究することである。具体的には、「どういった英語運用力の学習者(英語力)に対して、どの程度(量)、どのように英語を読ませると、どの程度語彙サイズが高まるのか」を検証するとともに、「多読にどのような指導を組み合わせることで、語彙サイズの習得効率を高めることができるか」を探究するために、以下の研究課題(RQ)を設定した。

RQ1: 多読プログラム開始前の英語運用力の違いにより、多読プログラム後の語彙サイズの伸長に差が生じるか。

RQ2: 多読プログラム期間内の読語数の違いにより、多読プログラム後の語彙サイズの伸長に差が生じるか。

RQ3: 多読プログラム期間になるべく多くの語数を読ませる指導を行った場合と、未知語に注意を向けて読む指導を行った場合で、語彙サイズ伸長に違いが生じるか。

RQ3 で採用した指導の学術的根拠は、多読を通して語彙を習得する重要な要因として、未知語との遭遇回数や、読解中の未知語への注意が先行研究で指摘されていることに基づく(藤井, 2020; 卯城, 2009; Waring & Takaki, 2003)。すなわち、多く読むことで遭遇する未知語のタイプ数と繰り返し数を高めることを目的に、授業外でも多読を課題として与えることによって多くの語数を読ませる指導を授業内多読指導に組み合わせた場合と、未知語に注意を払って読ませる指導を授業内多読指導に組み合わせた場合の間で、語彙サイズの伸長の差を検証した。

本研究は、以上3つの RQ を探究することを当初の目的としたものであったが、2020 年度にコロナ禍により当該年度における上記課題の探究はできなくなった。その主たる理由は、授業形態がオンラインとなり、当時紙媒体しか所持していなかった多読図書の利用や、紙媒体で実施する予定だった語彙サイズテストの実施が不可能になったためである。コロナ禍がいつまで続くか分からない状況だったため、2020 年度は研究計画を大幅に変更し、代表的な Graded Readers (GR: 英語学習者用の段階別読み物)と Leveled Readers (LR: 主に英語を母語とする子ども用のレベル別読み物)のコーパスを作成した。また、2020 年度のコロナ禍を受け、電子媒体の多読図書を買い揃え、翌年度以降の授業がオンラインやハイブリッド形態になっても研究課題が探究できる準備を整えた。そして、2021 年度の勤務校の授業がハイブリッド形態で行われることとなり、その実践をもとに RQ1~RQ3 を探究した。また、ハイブリッド授業では、学習者が紙の多読図書か電子図書かどちらかを、個人の選好により選べる環境にあったため、この環境を基に以下の RQ4 を追加して探究することとした。

RQ4: 学習者の図書の媒体選好(紙か電子か)の違いにより、多読プログラム後の語彙サイズの伸長に差があるか。

### 3. 研究の方法

#### (1) 参加者

2021 年度の日本の国立大学で工学を専攻とする大学学部 3 年生~4 年生 58 名を本研究の参加者とした。年度当初に受験した英語運用能力試験(ELPA の「プレースメントテスト」)を使用)の結果によると、参加者の英語運用力は CEFR で A1~B1 レベルが中心で、平均的には A2 レベルに相当した。参加者には、本研究の目的とデータ使用の範囲について口頭とスライド提示によって説明を行い、同意を得られた学習者のもののみをデータとして使用している。

#### (2) 研究手順

必修の英語科目内で授業内多読を、週に 1 回、15~20 分程度、研究期間で合計 11 回実施した。最初の授業で多読のやり方や意義などのガイダンスを実施した後、自分の興味関心や英語力に合う本を選ぶように指示をした。授業は対面とオンラインを併用したハイブリッド形態で行われ、多読図書は紙媒体を図書館から借りるか、電子媒体の図書にアクセスして読むかは、授業参

加形態に応じて学生の選好に委ねた。なお、紙の図書は附属図書館から 4,000 冊ほどが利用可能で、電子図書は Maruzen e-Book Library で 230 冊程度（そのうちのほとんどが紙媒体でも図書館に所蔵）が利用可能だった。授業内多読の後、先行研究（藤井, 2020）において、未知語に注意を向けて読んだ学習者の方が語彙サイズの上昇幅が大きかった結果が示されたことを受け、未知語に注意を向けさせる指導を組み込むこととし、その語彙サイズ伸長への影響は 2019 年度に行った、授業内多読に加え、授業外で多読する課題を課すこととなるべく多くの語数を読ませる指導を行った時と比較した。具体的には、授業内多読中に会った未知語を共有する活動を多読直後に 5 分間程度、合計 11 回行った。なお、残りの授業時間は、大学生用の英語教科書を使って、主に精読の指導を行った。

研究期間の最初（Test 1）と最後（Test 2）には、望月（1998）の語彙サイズテストを実施した。本研究では、参加者の英語運用能力から想定し、6,000 語までのサイズを測れるテストを利用した。具体的には、Test 1（2021 年 4 月実施）には、VST11～VST61 を使用し、Test 2（2021 年 7 月実施）には、VST12～VST62 を使用した。当て推量による正答の可能性を減じるために、一度も目にすることがない語は空欄にしておくよう指示した。また、テストの結果は成績には入れないが、取り組み姿勢は成績の一部として考慮することや、このテストは学習成果のフィードバックになること等、参加者が真剣に受験し、正確なサイズが測れるように配慮した。

Test 2 の後には、22 項目からなる質問紙調査を実施した。これは、先行研究（藤井, 2020）で用いたものを改訂したもので、読書中に会った未知語の意味を推測して読んだか、未知語の意味を推測して読んだかなど、英語の読み方に関する質問項目を中心としたもので、語彙サイズの伸長と英語の読み方の間の関係を調査するためのものである。

RQ1 に対しては、多読開始前に実施した ELPA の「プレースメントテスト」の結果を用いて、上位群（ $n=29$ ）と下位群（ $n=29$ ）に分け、両群間で語彙サイズ伸長の差を比較した。RQ2 に対しては、研究期間終了時における読語数に応じて、多読群（ $n=29$ ）と少読群（ $n=29$ ）に分け、両群間で語彙サイズ伸長の差を比較した。RQ3 に対しては、本研究の参加者のうち学部 3 年生のみを参加者とし（未知語共有群； $n=51$ ）、2019 年度に行った授業内多読を経験した学部 3 年生の参加者（多読課題群； $n=56$ ）との間で語彙サイズの伸長を比較した。未知語共有群には、授業内多読後にその読書の中で会った未知語の共有活動を 5 分程度、合計 11 回行ったのに対し、多読課題群は授業内多読 15～20 分を週に 1 回行った（未知語共有群と同じ）ことに加え、授業外で 3 冊以上または 3,000 語以上の英語を読ませる課題を 10 回課すことで、未知語のトークン数と遭遇回数を増やす指導を組み合わせた。RQ4 に対しては、参加者を紙の本のみ使用した群（PBO 群； $n=32$ ）、電子図書を半分以上使用した群（EB>H 群； $n=6$ ）、電子図書を半分以下使用した群（EB<H 群； $n=20$ ）の 3 群に分け、語彙サイズの伸長の差を比較した。

#### 4. 研究成果

本研究における参加者の多読状況は、表 1 に示す通りである。

表 1 多読状況

読語数	読冊数	最高語数	最低語数	最高冊数	最低冊数
<i>M (SD)</i>					
34,596.7 (20,709.0)	14.7 (24.2)	101,500	3,089	43	2

##### (1) RQ1：多読開始前の英語力による語彙サイズ伸長への影響

年度当初に受験したプレースメントテストの結果に応じて、参加者を上位群と下位群の 2 群に分け、多読プログラム前後での語彙サイズの伸びの結果を示したのが、表 2 である。

表 2 英語力別の語彙サイズの変化

	<i>n</i>	<i>M (SD)</i>			
		Placement Test	Test 1	Test 2	Gain
上位群	29	565.2 (61.1)	3,535.8 (578.4)	3,943.0 (583.8)	407.2 (316.7)
下位群	29	459.7 (36.5)	3,008.0 (534.6)	3,417.8 (546.8)	409.8 (515.2)

両群間で語彙サイズの伸長において有意な差は見られなかった（ $t(46.5) = 0.02, p = .981$ ）。上位群は A2～B1 レベル、下位群は A1～A2 レベルに相当するが、少なくとも大学生を対象にしたこの英語力の違いによって、15 週間での多読指導によって語彙サイズの伸長に顕著な差をもたらすわけではない可能性が示唆される。また、両群ともに 400 語程度の語彙サイズの増大が見られたことから、どちらの英語力の学習者にとっても、本研究で実施した未知語に注意を向けさせる指導を組み合わせることによって、語彙サイズの向上に一定の効果がある可能性も示唆される。

##### (2) RQ2：読語数による語彙サイズ伸長への影響

研究期間終了時における読語数に応じて、参加者を多読群と少読群の 2 群に分け、両群間で語彙サイズ伸長の差を比較した（表 3）。

表3 英語力別の語彙サイズの変化

	n	読語数	M (SD)		Gain
			Test 1	Test 2	
多読群	29	51,397.0 (12,111.4)	3,458.9 (472.7)	3,844.8 (559.5)	385.9 (341.9)
少読群	29	15,739.0 (8,542.8)	3,084.9 (684.9)	3,515.9 (643.1)	431.0 (497.8)

語彙サイズの伸長において、両群間で有意差は見られなかった ( $t(49.6) = 0.40, p = .689$ )。このことから、本研究で行われた両群間の読語数の差 (15 週間で 35,658 語程度) では、語彙習得量に顕著な差を与えない可能性が考えられる。しかし、先行研究では遭遇回数は未知語を付随的に習得するための重要な要因の 1 つであること (Nation & Waring, 2019) に鑑みれば、少読群の方が多読群よりも語彙サイズの伸長が大きかったこと、また 16,000 語程度の多読で 431 語のサイズ伸長があったことに対して考察が必要である。一つの可能性として、Test 1 における両群間の語彙サイズの差に基づく説明が考えられる。すなわち、一般的に高レベルの語彙の使用頻度は低レベルの語彙の使用頻度よりも低く (Nation, 2013)、付随的に習得できるだけの十分な遭遇回数を得るための読書量が多く求められる。多読では、語彙や文法にレベルごと制限を設けて書かれた GR を中心で使うため (高瀬, 2010)、元々の語彙サイズが大きい学習者ほど、そこから語彙サイズを多読で増やすためにはより多くの読書が求められる (Nation & Wang, 1999)。すなわち、GR を中心に多読をすることで新語を習得する効率としては、多読で用いる図書で既知語力パー率が 95%、98% を達成できるだけの必要最低限のサイズがあるならば、元々サイズが小さい学習者の方が高いと考えることができる。また、付随的語彙習得には相当数 (例えば、10 回以上 (Webb, 2007)) の遭遇が必要という先行研究を踏まえれば、少読群の読語数 (15,739 語) に比して、伸長 (431 語) が大きいことは指摘しておかなければならない。本研究の結果には未知語共有活動の影響が入っており、多読のみによる語彙サイズに与える影響を計測する研究が実施できなかったことは、本研究の限界点である。

### (3) RQ3: 多読の指導の差による語彙サイズ伸長への影響

本研究の参加者のうち、大学学部 3 年生のみ (未知語共有群) を参加者として再選出し、2019 年度に行った授業内多読を経験した大学学部 3 年生の参加者 (多読課題群) との間で、語彙サイズの伸長の差を比較した。未知語共有群度は、授業内多読後に、多読図書で出会った未知語の共有活動を毎回 5 分程度、合計 11 回行い、未知語への注意を高めて読ませる指導を組み合わせたのに対し、多読課題群は、授業内多読で読んでいるものと同じくらいのレベルの多読図書を授業外で 3 冊以上または 3,000 語以上読ませる課題を期間中 10 回課すことで、読書量と未知語への遭遇回数を増やす指導を組み合わせた。なお、授業内多読の時間や指導内容、多読後の授業での指導内容は両群間で同じである。

この指導の結果、15 週間終了時点で、多読課題群の読語数は 60,676.8 語であったのに対し、未知語共有群の読語数は 34,463.9 語であり、多読課題群での読書量 (概ね、3,000 語を 10 回、すなわち 30,000 語) 程度の差が生じた。Test 1 では両群間で語彙サイズに差はなかった ( $t(105) = 1.38, p = .171$ ) が、Test 2 では有意差が生じた ( $t(105) = 2.18, p = .032$ )。多読課題群は 346.2 語の増加であったのに対し、未知語共有群は 437.4 語の増加があり、有意差につながった (表 4)。

表4 多読に組み合わせた指導の差による語彙サイズ伸長への影響

	n	読語数	M (SD)		Gain
			Test 1	Test 2	
多読課題群	56	60,676.8 (38,914.5)	3,013.7 (620.2)	3,359.9* (597.0)	346.2 (-23.2)
未知語共有群	51	34,463.9 (20,957.0)	3,165.2 (504.2)	3,602.6* (550.9)	437.4 (46.7)

\*  $p < .05$

この結果から、未知語に意図的に注意を向けさせる指導は、読みを通して語彙サイズを増やすために有効であることが示唆される。しかし、Test 2 後に実施した質問紙調査の結果では、多読課題群の方が、面白い本との出会いや、好きなシリーズの発見などの項目で有意に高い値が示された。すなわち、読書としての楽しみにふれられたのは多読課題群である。限られた期間内で語彙習得の効率については、未知語を共有する活動は効果的かもしれないが、長期的、自律的な読書姿勢を養うという目的であれば、多く読むよう支援する方が効果的かもしれない。そして、長期的、自律的な多読につながれば、長期的には多くの読語数につながり、未知語への遭遇回数の増加の影響が大きくなることで、付随的語彙習得の効果を高めるかもしれない。多読にどのような指導を組み合わせるかは、授業の目的、目標、指導期間に応じて指導を行う必要がある。

### (4) RQ4: 図書の媒体選好による語彙サイズ伸長への影響 (Fujii, 2023)

参加者を紙の本のみ使用した群 (PBO 群)、電子図書を半分以上使用した群 (EB>H 群)、電子図書を半分以下使用した群 (EB<H 群) の 3 群に分け、語彙サイズの伸長の差を比較した結果が

表5である。

表5 図書の媒体選好別の語彙サイズの変化

	Test 1	Test 2	Gain
	M (SD)		
EB>H (n = 6)	3,301.3 (591.6)	3,871.8 (478.3)	570.5 (249.8)
EB<H (n = 20)	3,134.6 (557.4)	3,619.2 (552.0)	484.6 (364.3)
PBO (n = 32)	3,352.2 (652.0)	3,682.7 (688.3)	330.5 (473.2)

Test 1、Test 2 どちらにおいても、3 群間での有意差はなかった。すなわち、図書媒体の違いが、15 週間で約 35,000 語読む多読プログラムにおいて顕著な差はもたらさない可能性が示唆される。しかし、Test 2 後に実施したアンケートによると、EB>H 群が、PBO 群と比較して未知語を辞書で調べる傾向が有意に高く、本の媒体が英語の読み方に影響を及ぼす可能性があり、長期的に多読をすることで語彙サイズへの影響も出てくる可能性も今後研究をしなければならない。

## 5. まとめ

本研究で探究した RQ への回答としては、以下ようになる。

RQ1: 多読プログラム開始前の英語運用力の違いは、多読プログラム後の語彙サイズの伸長に差を与えなかった。

RQ2: 多読プログラム期間内の読語数の違いは、多読プログラム後の語彙サイズの伸長に差を与えなかった。

RQ3: 授業内多読に、未知語に注意を向けて読む指導を組み合わせた方が、なるべく多くの語数を読ませる指導を組み合わせた場合よりも、語彙サイズ伸長に効果的だった。

RQ4: 学習者の図書の媒体選好は、多読プログラム後の語彙サイズの伸長に差を与えなかった。

本研究は、15 週間で 35,000 語程度が多読実践の結果に基づくものであるが、多読開始前の英語力や読語数や本の媒体が語彙サイズに対して顕著な影響を与えなかった一方、指導方法の違いは結果に大きな影響を与えた。また、英語の読み方という観点では、図書の媒体や指導方法によって差が生じた (Fujii, 2023)。ここから、多読研究に関する重要な方向性を 3 点指摘する。1 点目は、英語の読み方の違いが長期的に学習効果に与える影響を調査する必要がある。2 点目は、指導方法によって学習効果に大きな差を生じさせる可能性があることから、実践においては授業の目標、目的に応じた多読指導を取り入れる必要があること、そして研究においては多読に関してどのような指導を行ったのかを具体的に記述する必要があることである。そして 3 点目は、長期的に多読を行えないことが現実的には多いことを鑑みれば、共同研究の推進や、コーパスを使った言語材料の観点からの研究の推進が求められることである。

## <引用文献>

Day, R. R. (2015). Extending extensive reading. *Reading in a Foreign Language*, 27(2), 294–301.

藤井数馬 (2020). 「1 年間の授業内多読が語彙サイズに与える影響について」『中部地区英語教育学会紀要』49, 33–38.

Fujii, K. (2023). Effects of book medium preferences in extensive reading on learners' reading amount, vocabulary size, and reading method: A case study from a hybrid class. *The Language Teacher*, 47(4), 3–10.

古川昭夫 (2010). 『英語多読法 やさしい本で始めれば使える英語は必ず身につく』小学館.

望月正道 (1998). 「日本人英語学習者のための語彙サイズテスト」『財団法人語学研究所紀要』12, 27–53.

Nation, I. S. P. (2013). *Learning vocabulary in another language* (2nd ed.). Cambridge University Press.

Nation, P. & Wang, K. M. (1999). Graded readers and vocabulary. *Reading in a Foreign Language*, 12(2), 355–380.

Nation, P., & Waring, R. (2019). *Teaching extensive reading in another language*. Routledge.

酒井邦秀 (2002). 『快読 100 万語！ペーパーバックへの道』筑摩書房.

高瀬敦子 (2010). 『英語多読・多聴指導マニュアル』大修館書店.

卯城祐司 (2009). 『英語リーディングの科学』研究社.

Waring, R., & Takaki, M. (2003). At what rate do learners learn and retain new vocabulary from reading a graded reader? *Reading in a Foreign Language*, 15(2), 130–163.

Webb, S. (2007). The effects of repetition on vocabulary knowledge. *Applied Linguistics*, 28(1), 46–65.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Fujii, K.	4. 巻 -
2. 論文標題 A comparative study of vocabulary levels between Japanese junior high school English textbooks and beginner-level extensive reading books	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Journal of Extensive Reading	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Fujii, K.	4. 巻 47
2. 論文標題 Effects of book medium preferences in extensive reading on learners' reading amount, vocabulary size, and reading method: A case study from a hybrid class	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 The Language Teacher	6. 最初と最後の頁 3-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.37546/JALTTTL47.4-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Fujii, K.	4. 巻 47
2. 論文標題 Effects of book medium preferences in extensive reading on learners' reading volume, vocabulary size, and reading strategies: A case study from a hybrid class	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 The Language Teacher	6. 最初と最後の頁 3-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.37546/JALTTTL47.4-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Fujii, K.	4. 巻 51
2. 論文標題 Practice and effect of extensive reading marathon at a Japanese engineering university: Teacher-student collaboration for autonomous reading	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The English Teacher	6. 最初と最後の頁 26-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.52696/LPGE8756	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Fujii, K.	4. 巻 51
2. 論文標題 Readability survey of English picture books for effective extensive reading: Focusing on Caldecott awarded books	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of the Chubu English Language Education Society	6. 最初と最後の頁 225-232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20713/celes.51.0_225	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Fujii, K.	4. 巻 9
2. 論文標題 A correlation survey between YL and Lexile scores in books for extensive reading: A proposal for a revised conversion table	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Extensive Reading	6. 最初と最後の頁 10-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤井数馬・川島嘉美	4. 巻 50
2. 論文標題 英語多読が自由英作文に与える影響 流暢性、統語、語彙への影響を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 17-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20713/celes.50.0_17	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 藤井数馬
2. 発表標題 中学校検定教科書と多読図書の語彙レベル比較 付随的語彙習得に与える可能性を中心に
3. 学会等名 同志社ことばの会年次大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤井数馬
2. 発表標題 中学校における適切な多読図書の研究 語彙レベルの観点から
3. 学会等名 日本多読学会年会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Fujii, K.
2. 発表標題 Differences in grammar and vocabulary between graded and leveled readers
3. 学会等名 The Sixth World Congress on Extensive Reading (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤井数馬
2. 発表標題 多読初期段階に用いる図書の種類が付随的語彙習得に与える可能性 コーパス分析から
3. 学会等名 全国英語教育学会第47回北海道研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤井数馬
2. 発表標題 中学校検定教科書と多読図書の語彙レベル比較 付随的語彙習得に与える可能性を中心に
3. 学会等名 同志社ことばの会年次大会
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 Fujii, K.
2. 発表標題 Effects of year-long extensive reading on Japanese EFL learners' vocabulary size
3. 学会等名 The 41st Thai TESOL International Conference 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤井数馬
2. 発表標題 ORTとFRLの使用語彙に関するコーパスを用いた比較研究
3. 学会等名 日本多読学会年会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤井数馬
2. 発表標題 英語の絵本を多読で活用するためのリーダビリティ調査 コールデコット賞作品を対象に
3. 学会等名 全国英語教育学会第46回長野研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤井数馬
2. 発表標題 高校英語教育における英語多読の意義・導入・指導法・効果
3. 学会等名 2021年度上越地区高等学校英語教育研究会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤井数馬
2. 発表標題 半期間の英語多読指導を通して見られた自由英作文の質的变化
3. 学会等名 The Japan Extensive Reading Association and the JALT Extensive Reading SIG present the ER Summer Seminar
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤井数馬
2. 発表標題 英語多読による効果と課題 読解速度および語彙への影響を中心に
3. 学会等名 JACET関西支部 文学教育研究会12月例会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤井数馬
2. 発表標題 多読を小さく始め、大きく広げるために 効果研究報告 -
3. 学会等名 第14回関西多読指導者セミナー（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 コスモピア編集部他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 コスモピア	5. 総ページ数 218
3. 書名 英語の多聴多読最前線	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------